

ヨハネの福音書 18 章 1～11 節 「主イエスによる救い」

スリランカで連続爆破テロが起こされ、多くの死傷者が出ました。イースター礼拝をささげていた教会もその標的とされてしまいました。怒りと悲しみを覚えます。しかし、スリランカの教会の当事者から、キリストの愛に基づく赦しのメッセージが発せられているとクリスチャン新聞の記事にありました。

教会の私たちは神様が正義と愛のお方であることを知っています。神様がすべてを正しく裁かれることを信頼し、憎しみに支配されません。神様の愛を受けて、その愛を表していくために召されています。私たちは救い主イエス様によって、神様の義と愛を知らせていただいて、信じて受け取り、その義と愛に生きていく者たちとされています。

今日の聖書箇所からも、イエス様の姿によって、神様の義と愛を知ることができます。

イエス様と弟子たちは、過越の食事の後、エルサレムの東にあるキデロンの谷を渡り、オリーブ山の麓にある園の中に入りました。1 節には園の名前は書かれていませんが、他の福音書によれば、ゲツセマネと呼ばれていたことが分かります。ゲツセマネとは、ヘブル語で「油しぼり」という意味です。その周りには昔からオリーブの木が多くあり、その実から油を絞る場所があったので、そう呼ばれていたのでしょう。

イエス様はどうしてそこに行かれたのでしょうか。それは 2 節にあるように、イエス様が弟子たちと「たびたびそこに集まっておられたから」です。そして、この時、イエス様は祈り、十字架に向かわれる決意を定めるのです。ヨハネはここで、イエス様の祈りについては書いていませんが、他の福音書にはそのことが書かれています。

それでゲツセマネでのイエス様の祈りの様子に簡単に触れておきます。イエス様はそこで弟子たちに言いました。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい」(マタイ 26:38)。そして、父なる神様に祈りました。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください」(:39)。「この杯」とは、イエス様がこれから向かわれる受難のことです。捕らえられ、十字架に架けられ、死なれることを指しています。神様の御子イエス様はこれからご自分に起ころうとしていることをすべてご存知でした。それが父なる神様のみこころであることを知っておられました。けれども、人となられたイエス様はその受難のことを思い、悲しみや苦しみをも経験していました。「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈られました。ルカの福音書には「イエスは苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた」(22:44)とあります。ゲツセマネでオリーブ油を絞るように、イエス様は絞り出すように汗を滴らせ、祈られたのです。

そして最後には、「わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください」と父なる神様のみこころと一つの思いになられて、受難に向かわれたのです。それはすべての人の罪からの救いのためでした。イエス様がすべての人の罪をその身に負って身代わりとして十字架で死なれることによって、人が赦されるためでした。それが父なる神様のみこころでした。イエス様はそのために十字架に向かわれたのです。

また、イエス様はユダがご自身を裏切ることをご存知でした。そして、2 節にあるように「ユダもその場所を知っていた」ことを分かっている、この園に来られたのです。こうして、イエス様は自ら十字架に向かわれるのです。

ユダは過越の食事の途中でその場から出て行き、祭司長たちのところに行って、イエス様を捕らえるための人々を連れて来ました。イエス様の祈りが終わった時、3 節にあるように、ユダに導かれて、「一隊の兵士と、祭司長たちやパリサイ人たちから送られた下役たち」がやって来ました。

その一隊の兵士と下役たちが「明かりとたいまつと武器を持って」やって来ました。イエス様を捕らえるために準備を整えて、抵抗されても必ず捕らえるとの覚悟を持って出て来たのでしょう。その物々しい様子に接したら、恐ろしさを感じたことでしょうか。やって来た集団を見た弟子たちはおそらく、何が起こるのかと足がすくんでしまうような状態だったことでしょうか。

その中でイエス様は自ら進み出て、「だれを捜しているのか」と彼らに言われました。彼らは「ナザレ人イエスを」と答えます。するとイエス様は「わたしがそれだ」と言われました。その時に、イエス様の前にいた者たちは、6 節にあるように、「後ずさりし、地に倒れ」ました。イエス様の毅然とした態度にひるんだのでしょう。威厳に満ちたイエス様のことばに兵士たちは圧倒されて、後ろに倒れました。

やって来た大勢の兵士や下役たちがその場を掌握していたように見えるかもしれませんが、そうではなく、イエス様こそが権威を持っておられました。逃げるところを捕まえられたのではなく、イエス様は自らご自身を渡されたのです。

もう一度「だれを捜しているのか」と問い、彼らが「ナザレ人イエスを」と答えると、イエス様は「わた

しがそれだ、と言ったではないか」と、自らを差し出していきます。

それと共にイエス様は、「わたしを捜しているのなら、この人たちは去らせなさい」と言われます。弟子たちのことを気遣い、彼らをその場から去らせようとします。それはどうしてでしょうか。

9節。このようにヨハネが説明しています。イエス様が以前に言われたことばが成就するためだったというのです。父なる神様が御子イエス様に下された者たちを一人も失わないためということ。つまり、神様が選ばれて、イエス様によって救おうとされた人々が、一人も滅びず救われるためであるということ。この場から弟子たちを逃すというだけでなく、弟子たちの救いのため、彼らの信仰のためだということ。

もし、ここで弟子たちがイエス様と共に捕らえられたら、この後の大祭司の尋問や総督ピラトの審判の場で、彼らが耐えられない、信仰を保つことができないと、知っておられたということでしょう。それで、イエス様が弟子たちのために逃れる道を備えられたのです。ここに、イエス様の弟子たちに対する配慮がありました。イエス様は愛する者たちの信仰が確かにされるために助けを与えてくださるのです。

聖書に「神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます」(I コリント 10:13)と約束されています。試練は私たちの信仰を養い、成長させるために神様がお許しになることです。しかし、神様は、私たちが試練の中で信仰を捨ててしまうような状況にはなさいません。試練の中で脱出の道を必ず備えてくださるのです。救い主イエス様を信じる信仰を与えられている信仰者にとって、このみことばの約束は確かな励ましとなるのです。神様の真実と愛を知っている信仰者は、試練の中でも信仰を成長させられ、守られていくことを確信していることができるのです。

兵士たちはイエス様に手をかけます。それで慌てて弟子のペテロは持っていた剣で切りかかり、一人の人の右の耳を切り落としました。あわや武力衝突が始まるというところを、イエス様が留めました。11節。

イエス様は「剣をさやに収めなさい」と命じます。マタイはさらに「剣を取る者はみな剣で滅びます」というイエス様のことばも記しています。そして、ここには書かれていませんが、イエス様は大祭司のしもべの耳にさわり、癒してあげました。

ここで大切なことが教えられています。この世で様々な戦いに直面する時にどうすべきなのかということです。それは目の前にある問題や危険に対して、剣で解決しようとしてはならないということです。

私たちは自分に危険が迫るとき、自分が攻撃されるとき、剣で守ろうとし、反撃しようとし、私たちは実際に剣を手にはしないでしょうけれども、暴力を振るうことがあるかもしれません。言葉の暴力を使うかもしれません。相手に非があり、自分には正当な理由があると思えるかもしれません。悪に対して正義を振りかざしたくなります。とっさに剣を抜いて、切りかかってしまいます。しかし、主の弟子たちは剣をさやに収めるべきです。イエス様の命令を思い起こす必要があります。剣を用いては解決になりません。「剣を取る者はみな剣で滅び」ることになるのです。

では、どうしたら解決が与えられるのでしょうか。イエス様は言われました。「父がわたしに下された杯を飲まずにいられるだろうか」。その杯を一人で飲み干すために、イエス様はご自身を捕らえる者たちの手に渡されたのです。悪の力に対する勝利は、父なる神様がイエス様に用意された杯をイエス様が飲むことによるのみもたらされるのです。

イエス様が十字架につけられたことは、悪の力が勝利したように見えたことです。しかし、イエス様は、十字架によってサタンに勝利し、神様の救いのみわざを成し遂げられたのです。罪の解決が与えられ、本当の救い、本当の平和が与えられるようになりました。

ただ、悪の力が存在しているこの地上では救いの完成はありません。しかし、天の御国においては救いが完成されるのです。そして、一人一人が天の御国に行くことができるようになるために、イエス様の十字架が架け橋となったのです。その救い主イエス様を信じるなら、罪を赦していただき、天の御国に行くことができるのです。

最後にペテロの手紙2章24節を開きましょう。

イエス様は父なる神様のみこころに従い、自ら十字架に向かわれました。それは私たちの罪をその身に負ってくださるため、それゆえに私たちが罪を赦していただき、罪から救われるためでした。イエス様の十字架は私たちの罪の身代わりでした。そのイエス様を信じるなら救われます。救い主イエス様を信じましょう。信じて救いをいただきましょう。

そしてイエス様は、ご自身を信じる者が信仰において成長し、歩み続けることができるように守ってくださいます。試練とともに脱出の道も備えてくださいます。イエス様を信頼し、恵みを感謝しましょう。

とっさに剣を抜いて解決を図ろうとする愚かな私たちですが、剣を収め、イエス様の十字架による本当の救い、解決、平和を求めていきましょう。